

1 小中一貫教育の推進（みなみ野中学校グループ）

目標	重点的な方策	自己評価（○：成果 △：課題）
義務教育9年間の学びに自覚と責任をもった教育活動の推進	みなみ野中学校グループ挨拶運動、基本的な生活習慣の確立を確実に実施する。	○【新規】グループ共通の取組として「おはよう！60分」の取組（11月・1月）を実施し、生活習慣の見直しを図ることができた。 ○挨拶運動、小中引継ぎ（3月）を実施し、小中系統性のある生活指導を推進し、児童生徒の心身の健康を図ることができた。
	小小交流、小中交流を実施し、中一ギャップの軽減を図るとともに、みなみ野中学校グループの一員としての自覚を育む。 ※七国小学校、七国中学校との連携も図る。	○6月みなみ野中3年生と2年生が合同桑都かるた大会を実施した。「はちおうじっ子サミット」を通して、グループ全体でいじめ防止の取組を実施し、グループ生としての意識を育むことができた。 ○【新規】みなみ野小学校と5年生は行事交流実施（計2回）、6年生は直接交流（計2回）を実施し、グループ生としての意識を向上できた。 ○10月みなみ野小と共にみなみ野中合唱祭に参加し、小中グループ生全員で合唱し、中学校進学への意欲を高めることができた。 ○1月みなみ野中学生徒会による中学校生活の紹介を実施し、中一ギャップの軽減を促進できた。 ○みなみ野中学生・七国中学生の職場体験を実施した。
小学校と中学校のカリキュラムのつながりの強化	【新規】中一ギャップの軽減を重視し、小学校で確実に定着させたい基礎的・基本的な学習内容（グループ独自の「みなみ野ミニマム」）を3校で共有し、協働して実践し定着を図る。	○3校合同で「小中一貫教育の日」を年3回実施し、各教科で「みなみ野ミニマム」を考察し、9年間で育てたい力と、学年ごとの育成段階の共通理解を図ることができた。 △令和8年度は、都立高校入試大問1を解くための学力を基準として、その学力を育むための学習の系統性を分析し、各教科の「みなみ野ミニマム問題」を完成させ、実施・分析を行う。また、学習内容の系統性を意識した授業づくりに取り組む。
	小中3校で共通したICT機器を活用した授業スキルの充実を図る。（小中一貫教育の日の充実）	○小中一貫教育の日で、3校が互いに授業参観し学び合いを実施する中で、ICTツールの活用について情報共有をした。
	【新規】みなみ野中学校グループとして保幼小連携の日を実施し、グループ内の保育園、幼稚園、小学校、学童保育所の連携の強化を図る。	○7月にグループ合同で保幼小学童連携の日を実施し、情報共有及び「保幼小架け橋カリキュラム」の作成を円滑に行うことができ、より一層連携を強化できた。

2 確かな学力の育成

目標	重点的な方策	自己評価（○：成果 △：課題）
基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着	朝学習、補充学習の効果的な活用を通して、基礎的・基本的な内容の定着を図る。	○放課後補習「のびのびタイム」（教員）、放課後補習教室「パワーアップタイム」（地域人財）、放課後子ども教室「きみだランド」（宿題の取組）の3つの場を設け、児童が活用できた。 ○計画的に補充学習を行った結果、はちおうじっ子ミニマムの第1回と第2回の平均正答率が上がった。 [国語]+3.5ポイント [算数]+4.5ポイント ○東京ベーシックドリルを年2回実施し、校内学力向上委員会での分析結果を基に、補習学習を実施した。 ○朝読書を年間25回実施し、児童の読解力、想像力、表現力の向上及び読書習慣の定着が図られた。 △【新規】年間78回、朝学習の算数科（33回）、国語科（45回）のモジュール授業を実施したが、補習学習としての効果はあったが、授業としての有効活用には十分ではなかった。実施回数を見直しを図り、より効果的に活用する。 △東京ベーシックドリル及びはちおうじっ子ミニマムの結果を踏まえた放課後補習の有効活用が課題である。
	市学力定着度調査及びはちおうじっ子ミニマムの結果などを活用し、地域と連携した放課後補習教室を週2回実施する。	○市学力定着度調査の結果をもとにドリルパーク「ミライシード」を活用した家庭学習を推進した。 ○3年生以上において、毎週一人一台学習用端末を活用した宿題に取り組ませたことで、児童のICT機器活用力が向上した。また、ICT機器を活用した学習について保護者理解が深まった。
	一人一台タブレット端末を活用した家庭学習を推進する。	○市学力定着度調査を分析し、課題を明確にした補習を実施することができた。 △正答率の低い項目について、組織的に補充を強化する取組を実施していく。

主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善の推進	【新規】校内研究として特別活動「学級活動」の授業研究を位置付け、主体的・対話的・協働的な学びの実現を図る。	○年5回の校内研究では、学級会の指導方法の共通理解を深め、児童の主体的・対話的・協働的に学ぶ力を育む指導力が向上した。また、児童が自分の考えを伝えたり相手の考えを聞いたりし、折り合いをつけながら意見をまとめる力、みんなで決めたことを協働して実践する力が身に付いた。 △児童アンケートの話合いの項目では、肯定的回答は80.6%であった。児童が成果を実感できるよう更に推進する。
	ICT機器を効果的に活用した授業を展開する。	○年3回の授業観察の中で、ICT機器の効果的な活用を位置付けた。また、ICT機器の授業での活用力向上のためのOJTを計画的に実施し、全教員がICT機器を有効活用した授業を実施できた。 △ICT活用のためのOJTは年2回の実施に留まった。更なる充実を図る。
体験的・協働的な活動の充実による思考力・判断力・表現力の育成	身近な郷土学習において、発達段階に合わせた課題を設定し、主体的・協働的に解決する探求的な学習を通して、思考力・判断力・表現力を育成する。	○3年生以上の全学年で郷土学習を行った。児童の郷土愛及び主体的・協働的に学ぶ力を育成できた。 3年生：「蚕を育てよう・八王子の絹織物」 4年生：「高尾山 日本遺産学習」 5年生：「八王子市の産業調べ・紹介」 6年生：「八王子市姉妹都市日光の学習」
	算数科・理科を中心にプログラミングのアプリケーションやツールを活用した学習を展開し論理的思考力を育成する。	○地域企業によるプログラミング教育(年18回)を実施し、児童の興味関心を高めるとともに、論理的思考力の育成を図った。 ○【新規】思考ツールとして「STEAM教育の見方・考え方」を全教科で活用し、思考力の育成において効果を上げた。 △全教科においてプログラミング教育の核である論理的思考の育成を実践していく。

3 豊かな心、人間性の育成

目標	重点的な方策	自己評価(○：成果 △：課題)
自己肯定感及び自己有用感の育成	問題行動調査やふれあい月間の取組を通して、認知されたいじめについて確実な解消まで継続して対応し、解消率の向上を目指す。また、いじめ対応の時間を活用し、子どもの心身の健全な育成及び自己肯定感を培う。	○ふれあい月間の取組で認知したいじめについて、いじめ対応の時間や生活指導夕会等において全教職員で共有し、確実な解消まで継続して対応した。 ○いじめ対応の時間、見守りシートの活用を確実に実施し、児童に寄り添った早期対応ができたことで、重大事態につながるいじめはゼロであった。
	【新規】校内研究の特別活動「学級活動」を通して、児童の「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の力を育成する。	○児童が集団や自己の生活や人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、自他の考えや思いを生かして合意形成を図ったり、意思決定したりし、他者と関わりながら主体的に実践していく力及び自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養うことができた。 △前述のことについて、更なる育成を目指し全学年で取り組む。
	不登校や登校しぶり傾向の子どもについては、校内委員会を含め、地域との関係機関とも連携しながら、安定した登校ができるよう支援していく。	○不登校や要支援児童について、適時校内委員会を開催し情報及び対応を共有した。市登校支援チームのスクールソーシャルワーカーとの連携を強化し、全児童が学校や地域、フリースクール等と繋がることになった。 △全教員が同じ考えのもと同じ対応ができるよう、令和5年度に「不登校対応マニュアル」を作成したが、活用の徹底が不十分である。活用を推進していく。
	校内での子どもが安心できる居場所づくりを推進し、どの子どもも安心して通える学校づくりを推進していく。	○学校コーディネーター、放課後子ども教室と連携し、毎日、午前7時30分から午前7時55分まで朝の校庭開放「早朝きみだランド」を実施した。毎回約100名の児童が活用し、子どもの朝の居場所づくりを実現できている。 ○人財の確保等学校運営協議会の協力のもと、地域人財を活用した校内別室指導支援教室「ぽかぽかルーム」を毎日開設し、不登校や登校しぶり、学校不適応の児童の居場所づくりを行った。これにより、本校の不登校出現率は減少しており成果を上げている。 R5：5.6% → R7：2.9% (1月末) △現在、『ぽかぽかルーム』は東京都の施策である校内別室指導支援員制度を活用している。本制度がR6・R7の2年間に限るため、R8からの運営が課題である。 ○多様な児童の心の拠り所・つながる場所づくりとして、全校児童に向けて、中休み・昼休みの校長室開放を実施している。R7は年間延べ1,103名(1月末)の児童が利用し、児童にとって安心できる居場所として定着できている。

	<p>特別の教科道徳の授業を始めとする教科指導や生活指導、特別活動、学校行事などを通して自他の良さに気付かせ、自己肯定感を高める。</p>	<p>○「命の尊さ」を重点項目とし、「八王子市いのちの大切さを共に考える日」の校長講話、特別の教科道徳の授業を実施し、児童の自他の生命を尊重する態度を育成できた。</p> <p>○異学年交流や学校行事等児童が自ら創意工夫して運営する取組の充実を図り、主体的に取り組む態度を育んだ。児童アンケートの主体性の項目では、肯定的回答は90%であった。</p> <p>○年間を通して、学校便り、ホームページ等で保護者・地域に自己肯定感の醸成について協働を呼び掛けた。児童アンケートの自己有用感の項目では、肯定的回答は89%であった。</p> <p>△自己肯定感・自己有用感の低い児童について、引き続き教科指導や学校行事等学校生活の中で、自他の良さに気づき、互いの存在を認め合えるよう働きかけを継続していく。</p>
	<p>保護者との一層の連携を図り、子どもの心を育む。</p>	<p>○個人面談を1学期と2学期に実施し、年2回実施した。学校と家庭が児童の情報を共有できる機会が増え、より一層連携して児童を育むことを推進できた。</p>

4 健やかな身体の育成

目標	重点的な方策	自己評価 (○：成果 △：課題)
<p>体力向上の推進</p>	<p>毎学期、全校で体力向上及び体づくり運動に取り組む。2学期、3学期に長縄大会を実施し、目標に向かって仲間と頑張る力を養う。</p> <p>オリンピック・パラリンピックのレガシーとして、トップアスリートやスポーツの専門家を招き、子どものスポーツ志向を高める。</p>	<p>○運動週間として、1学期は柔軟性を高める運動、2学期は持久走、3学期は短縄に全校児童が取り組み、体力向上を図るとともに、運動する楽しさを味わわせることができた。</p> <p>○2学期、3学期に長縄大会を実施した。クラスごとに練習に励み、目標に向かって頑張る力を養うとともに、仲間と共に成し遂げるよさを感じさせることができた。</p> <p>○年3回アスリートやスポーツの専門家による授業を実施し、みなみ野君田小学校オリンピック・パラリンピック2020レガシーとして定着させることができた。来年度も引き続き計画していく。 4年生：「三菱重工相模原ダイナボアーズ」ラグビー 5年生：「東京八王子ビートルズ」バスケットボール 6年生：パラリンピックメダリスト安中幹雄さんによる道徳授業</p>
<p>健康への関心の向上</p>	<p>1～3年生では、栄養士をゲストティーチャーとして、給食の食材を活用した体験活動や食育の授業を実施する。</p>	<p>○1～3年生全クラスで栄養士による食育の授業を実施し、児童の食への興味・関心を高めることができた。児童アンケートの食育に関する項目では、肯定的回答は85.8%であった。</p> <p>△児童の食育に関する興味・関心を更に高めていく。</p>

5 地域人財・地域資源を活用した教育活動の充実

目標	重点的な方策	自己評価 (○：成果 △：課題)
<p>地域人財や地域資源を活用した教育活動の推進を通じた地域の一員としての自覚の育成</p>	<p>学校運営協議会が主体的に取り組む教育活動（漢字検定、サタデースクール、君田米プロジェクト）を実施する。</p> <p>「社会の力活用事業」「地域の企業や大学」「学習支援ボランティア」等の地域人財を積極的に活用した教育を展開する。</p> <p>学校運営協議会を中心に地域人財を活用した放課後補習教室「パワーアップタイム」を週2回実施する。</p> <p>保護者・地域の読み聞かせボランティア「おはなしスタジオ」の充実を図り、情操教育を推進する。</p>	<p>○11月に学校運営協議会主催・保護者ボランティア協働による漢字検定を実施した。約80名の児童が参加し、児童の学習意欲の向上を図ることができた。</p> <p>○学校運営協議会主催の体験型サタデースクールを年間9回開催し、児童の体験活動の充実を図ることができた。</p> <p>○地域団体「みなみ野自然塾」の指導・支援のもと、5年生の米作りの学習を実施した。計画的に実施し、地域の方と協働する喜びと地域の一員としての意識の醸成を図ることができた。</p> <p>○地域企業によるプログラミング教育(年18回)、地域在住のネイティブスピーカーによる英語授業補助(通年)、地域企業への社会科見学(3年、5年)等、地域人財の活用を推進し、学習内容の充実を図ることができた。</p> <p>○地域企業への社会科見学(3年、5年)、地域団体「みなみ野自然塾」による稲作体験学習(5年)等、地域人財・地域企業を活用した教育を推進した。</p> <p>○年間を通して、地域人財を活用した放課後補習教室を週2回確実に実施し、学習習慣の確立及び学習内容の定着を図ることができた。年々参加児童が増加しており、児童の学習意欲が高まっている。 (R5) 704名 → (R6) 1,720名 → (R7) 2,221名(1月末現在)</p> <p>○保護者による読書ボランティアに加え、全学年を対象とした「おはなしスタジオ」を計画的に実施し、児童の想像力の育成及び感情の理解や共感力の醸成を図り、感性の豊かさを育むことができた。</p>

	<p>【新規】令和8年度の開校20周年行事に向けて、校内の周年行事委員会と学校運営協議会が連携を図り、児童の主体性を育む行事となるよう計画を進める。</p>	<p>○学校運営協議会と連携を図り、開校20周年行事に向けて見通しをもち大まかな計画を立てることができた。 △児童の主体性を育む行事となるよう校内の周年行事委員会を主体として、詳細な計画を立てていく。</p>
--	--	--

6 学校組織の機能強化

目標	重点的な方策	自己評価（○：成果 △：課題）
<p>ライフ・ワーク・バランスの理念に基づいた校務改善の推進</p>	<p>校務システムを活用した業務連絡の徹底や、ICT機器のアンケート機能の活用による作業の効率化を図り、教員が児童に向き合う時間を生み出す。</p> <p>全学年で一部教科担任制を実施し、教材研究や授業準備の時間の充実を図る。 【新規】高学年では更なる充実を図る。</p> <p>3つのOJT（学年OJT、校務分掌OJT、研修還元OJT（若手研修））を活用し、組織的な人材育成を図る。</p> <p>保護者の卒業アルバム委員を募集し、保護者参画型による卒業アルバム作成を推進する。</p> <p>【新規】週の授業時程を27時間にし、教材研究や児童理解等の時間を充実させる。</p> <p>方策全般を通して</p>	<p>○ICT機器によるアンケートを効率的に活用できた。 ○校務システムの活用促進により企画会議の廃止、夕会回数の削減等会議を精選し、教員が児童と向き合う時間を確保することができた。 ○【新規】職員会議の議題を精選し、校務支援システムを使った伝達を促進した。 △更に会議の議題を精査し、効率化を図る。</p> <p>○全学年で一部教科担任制を実施し（1年生は交換授業）、教科の専門性の強化、教材研究の時間の充実、児童に向き合う時間の確保、児童理解の深化を図ることができた。 ○【新規】5・6年生は、2教科において一部教科担任制を実施することができ、一層の効果があつた。</p> <p>○3つのOJTを確実に実施し、組織的に人材育成を図ることができ、教師一人一人に係る人材育成の負担が軽減できた。</p> <p>○卒業アルバム作成を保護者参画型とし、保護者有志と6年生アルバム委員の児童（窓口：6年担任）、学校（窓口：副校長）が協働してアルバムを作成した。これにより、6年生担任の大幅な業務負担軽減ができ、働き方改革を推進することができた。</p> <p>○月曜日を5時間授業にしたことで、児童情報の共有や学年の打合せ、児童対応、教材研究等を行う時間ができ、残業時間の軽減を図ることができた。</p> <p>○働き方を見直したことで、一月の時間外労働時間が平均60時間を超える教員ゼロを達成できた。 △国が示している一月の時間外労働時間は平均45時間であるが、平均45時間を超える教員は年間延べ16名おり固定者となっている。教員間で時間外労働時間に大きな偏りがある。校務分掌組織等を見直し一層の働き方改革を推進する。</p>
<p>校内支援体制の確立</p>	<p>週1回、いじめ対応の時間を設定し、いじめ防止対策、いじめの早期発見・早期対応の校内支援体制の確立を図る。</p> <p>毎月、校内委員会を開催し、校内の特別支援に係る諸問題について関係諸機関と連携を図り対応していき、支援体制の確立を図る。</p> <p>一人一人の子どもを大切にする教育の充実に向けて、特別支援教育の推進を図る。</p>	<p>○毎週木曜日の6時間目にいじめ対応の時間を設定し、教員、養護教諭、生活指導主任と情報を共有し、いじめ防止及びいじめの早期発見・早期対応に努め、組織的な対応ができた。引き続き組織対応の充実を図り、重大事態につながるいじめゼロを目指す。</p> <p>○月に1回、また、必要に応じて適時、校内委員会を開催した。特別支援コーディネーターを中心に、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、特別支援教室、関係諸機関との連携を図り、教員及び養護教諭と、児童の情報を共有し対応することができた。 △校内教職員全員が同じ対応ができるよう共通理解の一層の充実を図る。</p> <p>○校内の委員会組織に特別支援教育委員会を位置付けたことで、組織的な特別支援教育を強化することができた。</p>